

穴釣りの記

飯野 信也



はまってしまつてかれこれ十年である。家族には冬の寒いときに何もわざわざ結氷した檜原湖へ、

朝も早くに、大荷物背負つて、と言われ続け、そして、あきられられている。が、氷上のカラフルなテナント群を見れば、なぜそんなにしてまでという疑問はすぐに解決するといふものである。はまってしまつて檜原湖に通う酔狂者は数え切れないのである。今冬は二万人とある。

さて、十年前「先生、穴釣りやつか」と誘われるままに、某学校職員釣りクラブに入会。おもむろに手ほどきを受けたのを思い出

す。その師が次々と釣り上げるのに、私はというときさえわからないのである。ましてや「あわせ」などという技さえ理解できない。じつと竿先をみつめていると師は「誘え」と言う。竿を上下させると今度はひきがわからない。手はかじかみ、爪先は痛いほど冷たくなっている。初めてのワカサギは6尾であつた。ここがはまるか、懲りるかの分かれ道なのだが、私は、はまった。以来、シーズンに七、八回は通うようになってしまつた。テント、ドリル、バーナーと毎年のように買い足し、装備も充実、そして技術も我ながら格段に向上した、と思つている。

そもそも穴釣りの魅力はどこにあるのだろうか。釣り仲間同士の情報交換も楽しい。微妙な当たりなので竿先や仕掛けの工夫、餌の付け方等、个性的で話は尽きない。そして冒頭のごとく出かけ、遊魚券を買い求めその日の情報等を集め増す期待感。ポイントを地形等からあてずっぽうに定め、はやる気持ちを抑え穴を穿つ。仕掛けに餌をつけ第一投。この当たりを待つ緊迫感。そして当たりに合わせタイミング。指先に感じる手応

え。踊るワカサギ。仲間との会話。ここで忘れてはいけないビールの喉ごし等。これらすべてが魅力であり、醍醐味である。

細々と書いてきたが、最近ではこの釣りはかなり神経を使うものだと感じている。多くの釣果を得ようとすると、かなりの集中力が必要なのである。心配事などあつてはならない、あつても笑い飛ばす奔放さが必要なのだ。他を考えず、集中する。これが帰り道の「いやあー、今日もしつかり遊んだなあ」という爽快さにつながる。遊び全般そうなのだろうが、しつかり遊ぶと爽快さが残り、またやろ

部活動と私

亀岡 友博



うという気持ちとともに、実は次の日からの仕事に、そして生活にも張り合いが生まれ、質が違ってくるように思うのだ。「遊ぶために働くのだ」という訳の分からない信条のようなものも本気で「そうだ」と思えるのだ。釣りクラブの3大会の優勝カップをすべて手にした今シーズン、弟子も増えた。檜原湖をワカサギ釣りのメッカにしてくれた先人と漁協の努力に感謝しつつ、次を思うのである。いつまでもにんまりしてはられない。来シーズンまで十ヵ月しかないではないか。

(耶麻農業高等学校教諭)

部活動を通じ、子供たちと向き合い、一つの目標に向かって共に歩むとき、新たな発見をし、日々子供たちから教えられる。

初任地の三春町立中郷中学校

(現校中)でのソフトボールを振り出しに、転勤する度に野球、ソフトテニス、そして現任校での卓球と担当が変わつた。馴れ親しんだ競技で専門性を深められないこと